令和７年度　学校関係者評価報告書

Ⅰ．学校関係者評価の目的

１）教育に関する知見を有する者、臨地実習施設の関係者、看護管理者経験者、卒業生などの関係者から、学校運営・教育活動の現状における課題について助言を得ることで、学校運営の継続的な改善を図る。

２）学校関係者との連携協力により、特色のある学校づくりを推進する。

２．学校関係者評価委員名簿

規程	所属　氏名
教育に関する知見を有する者	国立大学法人　京都教育大学 副学長　相澤　伸幸
臨地実習施設の関係者	国立病院機構　京都医療センター 看護部長　髙田　幸千子
看護管理者経験者	医療法人亀廣記念医学会　関西記念病院　看護部長 川上　起久子
卒業生 （卒後一定のキャリアを持った者）	宝塚大学　看護学部 教授　東尾　公子

３．学校関係者評価委員会の実施状況

実施日時：令和８年３月１６（月）15:00～16:30

実施場所：京都医療センター附属京都看護助産学校　会議室

４．学校関係者評価委員会の議題

〇学校関係者評価の概要について

〇令和７年度　自己点検・自己評価結果

〇令和７年度　重点目標の取り組み報告（看護学科・助産学科）

〇意見交換・総評

Ⅱ　令和７年度　京都看護助産学校　重点目標

１．学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

２．将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

３．学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

４．職員が働きやすい職場環境の充実

Ⅲ　各学科の取り組みと今後の課題と取り組み

【看護学科】

重点目標１．学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

〇講義・演習・実習の関連を意識した計画的なカリキュラムにおける看護実践能力の育成

・カリキュラム検討：効果的な授業内容・方法をめざし、科目の教育内容の重複の検討

・臨床判断力育成に向けた学年のレディネスに応じた教育の実施

・看護技術の修得強化・評価方法の再検討

・卒業時の看護技術到達度向上に向けた技術確認（学校・臨地）、実施回数集計・評価
・思考しながら学ぶ教育方法の実施　グループ学習　ワークシートを活用した講義

〇教員の教育実践能力の向上

〇臨床との連携における実習指導の充実

今後の課題と取り組み

・基礎看護学における技術確認方法の変更と習得状況の評価
・効果的かつ学生負担を考えたワークシートとなるよう、学習効果の評価と再検討
・教員の研究時間確保、教育活動を研究的に取り組む

重点目標２．将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

〇学生確保につながる学生募集活動

・インスタグラムの強化　契約業者の支援・毎月評価　計 97 投稿　フォロワー数 549
学校での学習、学生の様子を伝える機会の増加　入試応募者の 8 割は閲覧
・ホームページに学校案内の動画掲載
・高校訪問・学校説明会の参加
・Web による入学試験システムの導入
→３年ぶり　定員以上学生数の確保

〇高い国家試験合格率の維持に向けた学習支援

・学習支援・3 年間を通した国家試験対策の実施・評価

〇国立病院機構および京都府内への就職者の確保（NHO：67.1%　京都府：73.7%）

〇効果的な内省による社会人基礎力の向上にむけた支援

・社会人基礎力の自己評価実施　各学年　年間２～３回　経年の行事・実習後に上昇

今後の課題と取り組み

・ニーズに応じた広報活動の実施　自校の魅力の配信
・3 年間を通した国家試験対策の継続実施・評価
・社会人基礎力の育成にむけた、指導方法の検討

重点目標３．学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

〇ICT を活用した教育の充実

・全学年 e－テキスト導入　先輩による後輩への活用方法の指導
・Google　classroom の活用継続　Google フォームでの出欠席連絡開始
・学校内 Wi-fi 環境整備

〇自己学習能力・自己評価能力向上にむけた支援

・学生自治会の主体的活動　学生間情報交換へのつながり（しらゆりメイト）
・学生への指示・指導方法の検討・変更
・全実習科目のルーブリックによる実習評価表作成

〇学生サポート体制の充実（個別面談、カウンセリング等）

・対面・Web カウンセリングの実施・定期的・必要時個人面談
→学生の声：忙しそうにしている教員に声がかけにくい

今後の課題と取り組み

・実習におけるルーブリック評価の実施・評価・修正
・Google フォームを活用した出欠席連絡の評価
・学校内 Wi-fi 環境を活用した実践・評価

重点目標４．職員が働きやすい職場環境の充実

〇年間の業務計画の作成・教職員間の業務調整・相互協力による業務の効率化

〇人的リソースの確保困難による時間外勤務時間前年比 12%増加

〇年休平均　日間取得/年間取得

〇勤務勤怠管理システム利用開始

今後の課題と取り組み

・実習指導教員、教務助手など、教員補助者の確保

・業務計画の見直し・業務内容の整理による効率化
　事務助手へのタスクシフト

【助産学科】

重点目標１．学生や地域社会のニーズに応じた質の高い看護教育の実践

〇妊娠期から産褥期までの助産実践能力を向上する教育の充実

１）実習前の教育プログラム（臨床推論、シミュレーション、妊婦健診 OSCE）

２）健康教育実習（中高生への性教育「赤ちゃん講座」、妊婦への出産準備教室「ファミリー教室」の学生による企画・運営、看護学科学生に対象者役を担ったリハーサルによる相互学習

３）分娩期ケア能力の向上

・実習前の技術教育、「内診技術」の実習前学習プログラム（研究取組中）

・分娩数確保のための実習施設確保（新規 2 施設）
　学生 1 人あたり平均 9.9 例

・実習施設との連携により経験機会の増加と到達度の向上

・ルーブリックによる分娩介助評価による到達度（3 年間比較）の向上

・卒業前分娩介助 OSCE による学生・教員相互による評価、リフレクション

４）助産学実習「継続ケース」

〇教員の教育実践能力の向上

・NHO３校での研究授業・各種学会発表、研修参加　研究発表 2 題

・公益社団法人全国助産師教育協議会へ会員校の入会
　→　助産師教員として、専門性の向上、研究能力の向上に向けて活動開始

今後の課題と取り組み

・当校独自の教育プログラム（臨床推論、シミュレーション、OSCE）を研究的に取り組み、個々の学生に応じた教育方法の検討・改善を継続する

・研究活動時間の計画的確保と研究活動の継続

重点目標２．将来看護師・助産師として国立病院機構及び地域に貢献できる優秀な人材の確保

〇オープンキャンパス　オンライン・現地開催で参加者数増加

〇広報活動：ホームページに Youtube 動画の掲載、インスタグラム

〇入学前就職説明会の実施。早期からの支援※助産師採用試験は 4 月が多くなっているため
　NHO：52.9%（R6.64.7%）、京都府内（再掲）：52.9%（R6.35.3%）

今後の課題と取り組み

・参加者のニーズに応じたオープンキャンパスの実施

・自校の魅力を発信し、優秀な学生を確保していく

重点目標３．学生が主体的に学ぶ教育環境の整備

〇ICT を活用した教育の充実（e－テキスト活用・Google classroom の活用）

〇実習中の報告・連絡・相談体制（担任用メールを用いた相談・指導）

Google カレンダーを用いた実習指導スケジュールの学生との共有

〇「助産診断・技術学」「助産臨床推論」などの実習前学習プログラムにおける予習参加、グループ討議型の授業の強化

〇学生サポート体制の充実：実習教務助手・オンラインによる実習指導充実

→　学生にとっては不足感

〇NHO3 校学生交流会のオンライン開催（ピアカウンセリング）

〇国家試験対策：合格 100%をめざした系統的な集中試験対策の実施

今後の課題と取り組み

・ICT を活用した学習支援を評価しながら、学習支援・対応していく

重点目標４．職員が働きやすい職場環境の充実

〇教職員間の業務調整・相互協力によって効率的に業務を遂行

・Google カレンダーを用いた業務管理、進捗確認、タスクリストの共有

〇人的リソース確保困難による時間外勤務時間前年比 33%増加

〇年間年休取得平均 11 日

〇勤怠管理システムの導入

今後の課題と取り組み

・実習指導教員、教務助手など、教員マンパワーの確保

・年間業務計画の実績評価に基づく実施と評価

総評

・両科において、学生の成長の可視化につながるルーブリック評価に取り組んでいる。

・助産学科においては、分娩件数の減少による実習での経験が困難な環境であるが、高い実践能力の習得を目指したカリキュラム編成が行われている。分娩件数減少に伴う実習機会の確保が引き続き重要であり、特に実習初期段階での手厚い指導体制の強化が求められる。

・学生定員を確保するための広報活動においては、Instagram の活用やホームページでの動画掲載、オープンキャンパスの工夫がなされたことが確保につながっており、成果といえる。

・マンパワー不足という課題はあるものの、教員の努力は高く評価できる。

・教員の多忙さから学生が声をかけづらいという課題が学生から指摘されている。ICT を活用した欠席連絡システムの導入など改善の取り組みが始まっているが、その効果を検証し、学生の声を丁寧に反映しながら、看護師・助産師の育成に今後も継続して取り組んでほしい。

・学生募集については、福井県からのニーズが見込まれる。今後は近畿北部への募集活動をさらに強化していくことも望まれる。

・母体病院である京都医療センターとの連携を活かした学校の魅力発信、学生・教員のメンタルヘルス支援の充実、そして教員の働きがいと学生の主体的な学びが両立する学習環境の整備に一層努めることを期待する。